
月蝕の空 ~ The moon of overhead death ~

牧川大葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月蝕の空 ～The moon of overhead
ath～

【Nコード】

N4516I

【作者名】

牧川大葉

【あらすじ】

現代。

様々な電子技術や、機械工学の発展を迎え、

「魔術」だとか、「魔法」だとかが夢の世界になった時代。

しかし、この町では不思議な事件ばかりが起きる。

どこの図鑑にも載っていないような、人を食らう獣。

操られたように全く同じ状況で自殺を行う少女達。

そして、町に流れる「死神ピエロ」の噂。

そんな中、一握りの魔法を得た少年と、魔法に対して銃で挑んだ少女の小さき物語。

…思い出せぬ過去に葛藤する者と、
思い出したくない過去に怯える者。

雲無き夜、道化師の様な顔をした死神は嗤う。

「君たちに、死という名の魔法を与えよう。
受け入れること死なり、抗うこともまた死なり…」

？・召喚師／1 真昼の追跡者（前書き）

どうも。 牧川です。（謎

だいぶ前に書きかけでやめてしまっていた物を再編してデビュー作としてお送りいたします。

とてつもなく（頭が）残念な文章が盛りだくさんなので、そんなのが読みたい物好きさんはどうぞお楽しみ下さい。

そうじゃない人も、感想とか、ダメ出しとか、ダメ出しとか待っています。

あとダメ出しとか。

…ええと。 とりあえずお楽しみ下さい…！

？・召喚師／1 真昼の追跡者

…男は逃げていた。

後ろから迫り来る「死神」から、一目散に逃げるように。

はあっ、はあっ、はあっ…！

脇道へと逸れ、小道を通り、路地裏を駆ける。

…ここはこんな道だっただろうか、この辺りにはまだ曲がり角があったのではなかったろうか…？
慣れた道でそんな疑心暗鬼に捕らわれながらも、男は生死を賭けた逃走をしていた。

…青年は追っていた。

前を走る男を、彼はどうしても逃がしなくなかった。

ビルの間を縫い、小径こみちを駆け抜け、裏路地を抜ける。

辿り着いたのは、不自然なほど暗い袋小路。

…そこには、行き場を無くした男が、ぺたりと座り込んでいた。

「はあっ… はあっ… …畜生っ…！」

息も絶え絶えになりながら床を叩き、男は叫ぶ。

見たところ年齢は20歳程度。スーツを着込んで、公務員っぽさがどこことなくにじみ出していた。

「…あんたが、線神先生せんがみ…でしたね？」

青年は、静かにそう問うた。 今までの追跡の疲れが、全くないか

のような落ち着きようだった。

「ああ、そうだ。俺が線神祐理（せんがみ ゆうり）だ…
全く 俺を…殺すのか…？」

汗だくの額を拭って、怯えた風な声が返される。

青年はそれにこくりと頷き、男はそうか、と返した。

「くくつ… ははははっ…！」

男は、笑った。可笑しくて、可笑しくて、出ない声で渴いた笑いをあげた。

「…ああ、良いさ。どうせこの力、おおっぴらに出来るものじゃない… 俺の名誉にならないものだ…」

さあ、殺せよ…」

線神は座ったまま、こちらに手を伸ばすようにして呟く。

彼の手が不自然に揺れているのが気になったが、

青年は、冷めたように一瞥をくれてやると、彼の手のひらには黒く燃える炎があつて。

彼の手のひらで、それは不格好な刃のようになり、
無慈悲にも、彼をそれを振り下ろす… が。

「…行けっ！」

それより先に男が叫ぶ。

「…っ！」

青年 鏡 かがみ 恭介 きょうすけは、そのまま路地裏の反対側へと吹き飛ばされる。

正確には、何かに飛ぶように後方へ押されているのだ。

次第に遠ざかっていく男の手には赤く光る何かが握られ、宙にはそれで描かれたと見られる謎の紋様が見えていた。

何か、喚ばれたか…！

恭介はすぐにそう判断し、目の前のそれを乗り越えるようにすれ違

う。

間一髪のところ、壁に叩き付けられるのは回避した、が…

「…逃げた、かな…」

暗い路地裏に、男の姿はなかった。

…まず報告に戻ろうとした、その時。

グルル… ガオン…

…少なくとも動物園では聞こえなさそうな複数の動物のうなり声。
きっと奴が去り際に残した幻獣種げんじゆしゆだろう。…数十匹とか言う生ぬ
るい単位ではなさそうだ。

ああ。 まだ、退屈せずに済みそうだ…

恭介は暗い路地裏で、小さな笑みを浮かべていた…

？ ・召喚師 / 2 捜査報告と銃器まみれの少女

「…それで？ これはどういうこと？」

…デスクに肘をついて些か不可思議そうに報告書を眺める彼女は、
篠岸 八雲。しのぎし やくせ

この不気味な探偵社の、一応社長である。

「資料にあつたとおり、あいつは召喚師だった。

…去り際に、小型から大型、地中、空中、果ては何もない空間から
342体の幻獣種を召喚して行ったってそう書いてあるでしょうに。
」
自信たつぷりに恭介は答える。

「お前、それを全滅させてきたのか。」

…上層部あつちに移つたらどうだ？ こんな辺鄙なところより向こうの方
が暇もしいし、儲かるぞ？」

「遠慮する。 あつちはあつちで、書類やら何やら退屈そうだ…」

八雲は、ふむ。 まあいいが。 と興味が無さげに報告書に目を通し
ている。

…この人は、こういう人だ。
自分で振った話題にすら興味が無さげにしている物だから、この人
の話題の主題という物がいまいち掴みにくい。

…数秒の沈黙を、八雲が遮る。

「それで。 線神の行き先は分かったのか？」

「それはまだ。 気付いたら居なくなってたから、たぶん幻獣に乗
って帰ったんじゃないか？」

「…真逆^{まひが}。私としては342体の幻獣を召喚しただけでも信じられないのに、それに指令をして運搬を頼んだ？
…だとしたら、22歳じゃなくて20000歳単位の魔法使いよ、それ。」

…そして最後に、今までにそんな魔法使いが現れた、なんて聞いたことは無いがね。と付け足した。

「じゃあそれ、賢者の石じゃないの？」

今までずっとソファに寝そべってこちらの話を聞いていた女が、漸く口を開いた。

彼女の名前はマリー・ネージュ。

流れるような金髪に、蒼の瞳。

すらっとした長身と、それで居てか細くない四肢。

…そんな美貌を持った彼女の唯一の欠点とは、こうしている今も一人分の大きさの巨大な銃器をばらしては組み立てているところだった…

「…そう言えば何か持ってたな。…報告書に書くの忘れてたけど。」

「ははあ、賢者の石か…」

ああ、確かにそうだな。それならこの件にも納得がいく。」

…八雲はどうやら通じたらしい。
せっかくだから、質問しておこう…

「なんだ？その賢者の石って？ 何処かのファンタジー小説の？」

それに対して片眉をつり上げて、八雲。

「あー… 賢者の石は賢者の石でも、錬金術とは直接関係のない方だ。」

… やっかいな俗称だ、同名の本物があるって言うのに…」

「…ヤクモ。 良いから続きを話してあげなよ…」

脱線気味な八雲をマリーが正す。

「おっと、そうだった。」

この場合の賢者の石は、『永遠の魔力の具現』だ。」

「…永遠の魔力？」

「そう。それ自体から魔力が湧き出て、持ち主、いや周囲の全てに魔力を与え続ける。」

なのに対価も代償も無い。 夢のような石だろう？」

「そんな物を、どうしてあいつが持つてる？」

「まあ待て。 話は終わってない。」

… 無いんだよ、そんなもの。」

… はあ、とため息をつく。 つまり、どういことですか。

「恭介。 つまりこういうこと。 まだ、誰もそれが実在しているのを見たことがない。」

だから、ヤクモが言いたいの…」

「まだ、現代に観測者のいないおとぎ話レベルの物質を、そいつは持っている可能性がある。」

… マリーの発言を断ち切って、八雲が繋いだ。

さて、八雲のこの目の輝きようを見るに、きつと…

「…要するに。 今回の仕事は…」

八雲は、報告書を机に置きながら言った。

「そうだな。 要点をまとめると、賢者の石らしき物の確認、回収と、線神祐理を生きたまま捕縛すること。」

それが、本格的な捜査の始まりだった。

~~~~~

やれやれ。 危うく本当に殺されるところだった。

町で出会った瞬間にアレだ。 一体どういう原理で奴は闇を操っているんだ？

…そんなことより、俺を殺すように依頼したのは誰だ？

俺は今まで誰にもこの召喚術ちからを見せていない。 じゃあ、誰が、何の目的で…？

分からない。 俺の頭の中で先ほどの出来事がぐるぐると廻っている。

まずはこの周辺の見張りを強化しよう。

鳥たちなら周辺の異変をいち早く察知してくれるはずだ…

~~~~~

~~~~~

「それじゃ、捜査に行ってくる。」

「あ、それじゃアタシも行くよ。行くところがあるから。それじゃね、ヤクモ。」

キィ… バタン。

「…やれやれ。」

一人残った八雲は冷めかけの紅茶を口にしながら今し方手元に届いた資料と報告書に再度目をやる。

線神祐理。 22歳、元教員。

県内の高校の化学教員をしていて、ある日突然学校どころかアパートにも姿を見せなくなった。

少し前に行方不明届けが出されたようだが、やはり大人の失踪となると警察は動かない…か。

「…やはり気になる…」

普通、召喚師というものは何年も、いや何十年も魔術と、生物について研究しなくては身につかない。

例えば他の召喚師から”コツ”を教えてもらっ、等なら話は別だが、それでも22歳の若造に召喚術など使えるのだろうか…？

…本当に、賢者の石の存在を認めなくてはならないのだろうか…

「…まあいい。きっと、恭介達が何か掴んで帰ってくるだろう…」  
空になったティーカップを机に置きながら、八雲は席を立ち、部屋を後にした。

同日、町外れのバー…

「…悪い、まだ準備中…」

つて、やあ、マリーじゃないか。今日は随分と久しぶりだね。」

「どうも、マキデラ。景気はどう？」

街の比較的寂れたところにひっそりとあるこの店。夜間、普段はバーとして営業している。

マリーはカウンター席… その一番壁側に座り、背負っていた大きな楽器ケースを壁に立てかけた。

「まあ、良くはないね。」

…というか、別にいいよマリー。今、どうせお客さんはいないんだ。…店の裏だろ？」

しかしこの店の真の顔は、「武器屋」である。

法の目を逃れ、限られた者にだけ武器を販売する、いわゆる、「裏の武器屋」なのだ…

「…あ、いつもの弾薬をセットで良いなら持ってくるよ？」

「あー…今日は武器を買いに。」

店の主、巻寺は少し驚いたように目を見開いた。

「珍しいな、今日は銃本体かい？」

「今度の仕事は、ちよつと面倒な事になりそう。 やっぱり、使い慣れたのがいい。」

ブレンガン、ある？」

「ブレン… ブレン軽機関銃か。」

ふむ、と少し考えた仕草をした後、在庫を確認してくる、と更に店の奥へと消えていった。  
待つこと、数分。

「済まない、在庫はマーク1の型しかないみたいだ…」

「それでいいよ。 必要なら、自分でいじるから。」

「そうか。 なら、こつちだ。」

誘われるままに、店の奥へ。

…カウンターの内側、本来なら事務所に繋がっているであろう階段を、ゆっくりと上っていく。

窓一つ無い部屋に並ぶのは、様々な重火器や、刀剣類である…

「さ、これだ。」

カウンターのの上に置かれたのは、全長60cmほどのマシンガンだった。

9kg近い重さを誇るそれは、分速500発程の弾丸を目標にたたき込める…

が、彼女の眼は、その銃を捉えてはいなかった。

「マキデラ。 あれ…」

マリーが指さした先にあった物、それは…

「ああ、アレか？ …気になるか、マリー。 なかなか出会えない代物だぜ？」

自信ありげに腕を組みながら巻寺は自負する。

「…アレも欲しい。 幾ら？」

「…さあ、交渉次第だな。」

…この日。 あるバーのドアには営業時間になっても準備中の札がかかっていたという…

? ・召喚師 / 4 心眼、真眼

恭介は夜の街を、当てもなく歩き回っていた。

この街は眠らない。

0時を回ろうという時間になっても、街はまだ、宵の様な活気を残している…

「…はあ。」

…俺は八雲に指示された場所で標的に出会い、それを「壊す」のが仕事だ。

故に、こういう捜し物には一切と言っていいほど才能を発揮できないのだ…

「…とつと尻尾の端っただけでも見せろって言うのに…」

解体工事中の廃ビルを見上げながら、誰宛でもない愚痴をこぼす。すると、どこかで何かの鳴き声が聞こえた。

くわう。 そう、例えるならばそんな感じ。

くわあくわあ。 所々にいて、まるで連絡を取るように、それらは喚き回っている。

闇に浮かぶ鋭い双眸。 月明かりに照らされたそれは、無数の赤い点が宙に浮いているようで不気味だった。

「…もう日も落ちてるのに… 何で鴉が…？」

それらの瞳は、暗闇からこちらを見据えるように。

幾十もの鋭い輝きその全てが、恭介の動き一つ一つを見逃さないよ

うにしているかのように、  
その群れはこちらを睨み付けていた。

恭介はそれを、ふん、と一瞥し、たいした情報もないまま事務所に  
戻ることにした。

…そう言えば、途中で通ったバーにマリーのバイクが止まっていた。  
開店時間も過ぎてるのに開いてない辺りは、きっと何か問題を起こ  
しているんだろう。

特に俺は関係ないので、きっと今忙しいであろう店主に手を合わせ  
て通り過ぎてきたのだけれど。

~~~~~

事務所、ある一室…

「…はい、そうですか。」

…そうですか、いえ、夜分遅くにどうもすみません。
では、これで失礼します。」

…八雲はふう、と本日何回目かのため息をついた。

線神という男、なかなか用心深い。

件の路地裏以降、姿という姿を一切見せないのだ。

知り合いの刑事にも当たってみたが、全く情報がないそうだ。

今回は、今までのようなヤワな依頼じゃなさそうだ…

…どこからともなくタバコを取りだし、一服する。

何処かの誰かの受け売りだが、これではタバコでもなければやって
いられない…

「…研究熱心な召喚師でないことを祈るとするか…」

背もたれの付いた椅子でどっしり構えてくつろいでいると、不意に事務室の方から物音が聞こえた。

社員の誰かが帰ってきたのだろう。誰が帰ってきたのかを確認するために、事務室への扉を開けた。

「…恭介か。…やはり早いな。」

「…どうも。探し物は苦手です。」

自分を皮肉るように恭介は呟いた。

私は、とりあえず話をするために自分の席に着く。

「そうだな。お前には物の探し方を教えてやろう。」

「…ちよつと来い恭介、これはお前にどういう風に見える?」

私が差しだしたボールペンを、彼はまるで遠くにある物を見るように顔をしかめて見て…いや、睨んでいる。

「…ただのボールペンだと思っけど。」

「ああ。確かにこれはそうだ。じゃあこっちはどうだ?」

「…今度差しだしたのは私の万年筆だ。この万年筆は…」

「…八雲、何が言いたい? 俺には、ただのボールペンと古ぼけた

万年筆にしか見えない。」

「…じゃあ…」

これでもか？ と恭介の目を貫かんばかりに万年筆を突き出す。ヒュツ、と空を切る音が、その鋭さを物語っている。

…もちろん勘のいいこいつのことだ。食らうなんて事はまず無い。

「っ… 何のつも… …あれ…？」

飛び退いて体制を整えた恭介は、目をぱちくりさせたり、目を擦ったりして何度もこちらの方を見ている。

…正確には万年筆を見ていた。それはそうだ。さっきまで間違いなくただの万年筆だった物が、今では赤く輝いて見えるのだから。

…そしてその赤い輝きは、恭介にとつてとても見覚えのある物だった…

「前に分かったんだがお前はな。自分が興味のある物しか『視えてない』んだ。

今私を一瞬でも敵と思い、これを『自分を傷つける武器』だと思っただから、お前の目は視える様になった。身を守るためにな。

…その感覚を忘れるな。そして、気になった物はよく見る。それが、きつと正解への近道かもな。

…ああもつたいない。今タバコはすごく高いんだぞ？」

ほとんど吸うことなく減ってしまったタバコをもつたいなさげに見つめながら火を消す八雲に、恭介は問いかける。

「八雲。その、万年筆… …なに。」

「何って…万年筆は万年筆さ。世界中どこを探してもこれ一本しかない、激レア限定品だ。それより恭介。ちょっと下行ってタバコ買ってきてくれないか？ 銘柄は問わん。悩んだら適当に選んでいいぞ。ああでもメンソールのタバコはやめてくれ。下で売ってる奴は不味いからな。」

今日という日を境に恭介は、八雲という人間が分からなくなった。

？・召喚師 / 5 やつれた店主と闇夜の襲撃者

「こんなところ普段入らないからなあ…」

…事務所があるビルの一階。自動販売機があるだなんて初めて聞いたが、それらしき物は見あたらない。

むしろ、八雲が言った位置には、長年何か重くて大きな物が置かれていた跡はあったが、それ以外の物は何もなかった。何があったのか知らないが、いろいろと面倒なので…

「…外に買いに行った方が早いかな…」

どうせ八雲なら待たせても構わないだろう、と別の所に買いに行くことにした。

こんな気分を外を歩くのは、久しぶりだ。

夜に出歩くのは嫌いじゃない。風のある夜なんかは、良く外を歩いていた物だ。

しかしこの町の夜は、風が吹かない。高いビルが多くて、風が流れないのだ。

…一体あれはどこでの話だったか…

…ふと、自分が先ほどのバーの前にいることに気がつく。マリーのバイクはない。巻寺に挨拶ついでに、八雲用に備蓄してあるであろうタバコをもらいに行くことにした。

バーのドアを開け、店内へ入る。
…主の姿はない。

「…やあ、巻寺さん、居る？」

すると二階の方から、ゆっくりと階段を下りてくる音が聞こえた。
…二階から、まるでB級映画のゾンビのようにつらつらと巻寺が降りてきた。

「やあ、恭介… すまないが、今日はもう閉めるところだ…」

やけに疲れ切った巻寺に何が起きたのか聞くと、何でもマリーがここにあるとある商品を値切れと迫ったらしい。

値切れ、値切らない、値切れ、値切らないを繰り返している内に互いに酒が回り、何と数時間にわたる闘いを繰り広げたようだ。
そのうち、互いの私情に関する脅しの様な事が続いて、結局…

「…巻寺さん、負けちゃダメだと思っんですけど…」

「うるさい… もう何も言っな…」

…ちなみに二人とも、アルコールが入ると異常に燃え上がるタイプだ。

そんな巻寺を慰めつつ、八雲のタバコの話をするとかウンター下の引き出しからカートンでくれた。

お金は今度でいいよ、今は休ませてくれ…と言って彼は店の奥に閉じこもってしまった。

これは数日、店はお休みだな…。

~~~~~

そんな、帰り道。

少々時間を食いすぎてしまったため、早く帰ろうと路地裏を通り件の廃ビルの前を通りかかった。

カラスはまだ居る。

動物は詳しくないけど、このカラスは一体どうしてしまったんだ…なんて考えていた、その時。

先ほどより、けたたましい声でカラス達が喚き出した。

「な、なんだなんだ…!?!」

カラス達は鳴き止まない。

まるで、誰かに何かが訪れた事を伝えるように…

そして、気配を、感じた。

飢えた獣の匂い。 血に飢えた、動物の匂いだ。

数はそう多くない。 大型の狼が、4体と言ったところか。

もちろん、町中にこんな動物が居るわけがない。

…でも、召喚師の気配はない。 召喚師自体は既に居ないか、それともこいつらは、ここらで放し飼いにされている…?

何にせよ、線神の仕業には違うまい。 説明しづらいけど、何かを感じてるんだ。

「…考えてる暇はないか。」

手頃な長めの鉄パイプを拾う。 ずしりと来る重み。 よし、これ

は悪くない。

そして… それは廃ビルの影から現れた。前足を伸ばせば、身長は俺の数倍はあるだろう。

狼の様な姿をして、大きさは狼のそれを二回り以上も超えている…

既に前後を挟まれていた。

でもそんな程度、何の問題でもない、それより…

…その口の端には、紅き雫が染みついでいて。

明らかに、既に獲物を狩った後の様だった…

「やれやれ。何を食ったか知らんが、まだ食い足りないのか？

このいやしんぼ共め…」

言葉が分かるのか、彼らは少し苛ついたきたようだ。

「…俺を食いたいなら早く来いよ、俺も…

『遊びたくて、仕方がない』んだ。」

そうして獣たちの疾走は始まる。

四方から、自分を中心とするように円を描きながら、そしてその円をどんどんと縮めていく。

恭介はリーチの長さを利用し、目の前に来た一匹に対し…

破碎の一撃！

槍のような強烈な突きが、ある一匹の横っ腹に食らいついた。

それで一匹は情けない声を上げてビルの方へ転がっていったが、その隙を背後の三匹は見逃さなかった。

…統率のとれた獣故の正確な攻撃。

鉄すら易々と裂いてしまいそうなその爪は、それでも恭介に届くことはない。

ゆらりと流れるように後ろにステップし、ビルの壁を背にする。

そして、獣の攻撃を避けた後、明後日の方向に鉄パイプを投げつけた。

…それにはお構いなしに、丸腰で、なおかつ追い詰められた恭介に、二度目の無慈悲な爪と牙が襲いかかり…

轟音。 崩れるような甲高い音が闇夜に響く。

…鉄骨の雪崩が獣たちを打ち据えていた。

恭介は崩れそうな鉄骨積みをも、投げつけた鉄パイプで崩したのだ。

それらに潰されて、二匹がもう動かなくなった。

残るは、それを回避した一匹。

「…なんだ、意外と歯ごたえがないんだな…」

数瞬で仲間三匹を倒されたのを見て、巨大な獣すら少し怯えている。

…口元には歪んだ笑みを。

雪崩と共に足下に戻ってきた鉄パイプを拾い、

「じゃあな。 次は俺みたいにな奴と出会わないと良いな…！」

垂直に、脳天を砕く一撃。

骨を砕く嫌な音と共に、鉄パイプが地面を叩いた。

彼らはこの世界ではその死体が残らない。

命を失った器は闇に溶け、そのまま何もなかったかのように消えて無くなった。

「…っ… …今の…？」

…しかし、恭介は彼らが最後を迎える前に、「答え」を見つけた。

それが、こいつらを見たとき、線神の仕業と分かった理由。

そして、八雲が言っていたことの、本当の意味。

…兎にも角にも、恭介はまず準備をするために事務所に戻ることにしたのだった。

？・召喚師／6 二人の仕事人、それぞれの思惑（前書き）

長らくお待たせいたしました（？）

ついに1章、第6話でございます。長かったです。

もうすっかり飽きてるかと思いますが、しっかり付いてきてくださ  
いねーっ。

それでは、本編をどうぞ。

注・かなりささっと書いたので、後々かなり書き換えるかもしれ  
ません。

悪しからず。

？・召喚師／6 二人の仕事人、それぞれの思惑

~~~~~

…事務所。

すべての部屋を見てみたが、八雲はいなかった。

…いない代わりに、メモ書きが八雲の机に乗っていた。

「恭介へ

煙草は机の右の真ん中の引き出しに入れておいてくれ。少し出かけてくるが、帰りはいつになるか分からない。以上。」

こんなときにどこへ行くというんだ。

八雲の意見でも聞いてから、あそこへ行こうと思っていたのだが…

…まあいい、と煙草を机にしまったため引き出しを開けると…

「…？」

…どうやらまた、メモ書きが入っている。

して、その内容は…

ところで、お前がこれを読んでいる、ということとは…

もう線神は捕えて戻って来たんだろうな？ ヒントはやったぞ。

まだだというなら、さっさと行って来い。もうきつと先客も向かっているぞ

…ああ。わかった。

やっぱり、八雲はもう気付いている。犯人の居場所も、何もかも…

化け物だろうがなんだろうが、この弾で倒せない物はないのよ…」

マリーがバイクから降りる。

…ああ、説明がまだだったか。

マリーがツナギの代わりの上着を脱ぎ捨てると、その中には拳銃、機関銃、散弾銃などを身にまとっていたのである…

「さ。お仕事お仕事。

どこからがいいかしらね…」

マリーはそんな重装備を担ぎつつ、暗いビルの中へと消えていった。

~~~~~

…そして、数分後。

止められたバイクの前に、一人の男が現れる。

この男もまた異様な格好をしていた。

黒いカジュアルなジャンパーに、青のジーンズ。

…そこに、身の長い山刀を一本鞘付きで携えている。

先ほどまでいた場所が、こんなにも違って見える。

飛び回っていたカラス達が、今の自分にはうつすらと赤く輝いて見える。

要するに、アレは操られているんだ。 …おそらく、線神に。 い

や、そうに違いないだろう。

…廃ビルを眺めて、はあとため息をつく。

俺も大して良い住処を持っていないわけではないが、これは酷い。

ちよつと、軍艦島にある廃墟なんかを想像すると良いだろう。 そ

れほどに、この建物は建物と言う存在意義を持っていない。  
解体途中で放置されてしばらく経っている。確かに、身を隠すに  
はちょうど良い…

…ためらわずに廃ビルに入っていく。

所々塗装が剥がれていて、金属で出来た物は大体錆びている。

嫌に静かだ。妙な気配はするのに、仕掛けてくる様子がない。

…しかし、聞こえる。もっと上の階から、騒がしい声はいくつも、  
いくつも…

早く行かなければ。

この先に、きっと何か既に待っている…

？・召喚師／7 ある術者の眩き（前書き）

ずいぶん日が開いてしまいました。

しかもぜんぜん進んでません。 とうしたものが。

とりあえず、今回の分をささっと投稿しようと思います。  
それでは、どうぞ。

？・召喚師／7 ある術者の眩き

~~~~~

ああ、まずい。

俺の居城に、入り込んできたものが居る。

ここは俺だけの場所だ。攻め入られることは、もちろん良しとしない。

…くそつ、至る所の罾が無効化されていく。 どういうことだ？

俺が、この5年どんな思いをして机に向かってきたと思うのだ。

この石を自在に操れるようになるまでに、5年もかかった。

あの男は誰でもすぐに使えるようになっていたのに。

だが、信じて正解だった。 魔法は、あったのだ。

しかし、これだけの獣を操れるようになったというのに、

その努力の結晶である物がすべて壊されている。

昼間の死神の姿を思い出して、男は身震いした。

まさか、こんなところまで、あいつは来たのだろうか…

…ああとにかく、この部屋へ向かうものが居る。

俺の邪魔をする奴は殺してやる、殺してやる、…

ポケットに手をつ突っ込んだまま、男は呪いのように呟く。

思い出すのだ。

そして、

…そうか。 俺は今、出来るじゃないか。

「…俺が、殺してやる」

男はポケットの中で握り締めたままの赤い石を離さないまま、部屋を後にした。

自らの手で、その侵入者を排撃するために。

~~~~~

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4516i/>

---

月蝕の空 ~ The moon of overhead death ~

2010年10月10日05時37分発行